

[書評]

野林正路著

『意味をつむぐ人びと』
——構成意味論・語彙論の理論と方法』

山田進

本書は、副題にあるように「構成意味論・語彙論の理論と方法」を詳述したものである。著者は「“認識”系言語構成体の実証的、体系的な解明を行い、それを“伝達”系言語構成体とリンクさせる言語理論と、記述方法論とを総称して、“構成意味論” Constitutive Semanticsと呼んできた」(p.7.) のであり、それを、構造言語学の「業績と手法を継承しつつ、なお、言語(認識言語と伝達言語)の意味面を実証的、体系的に拓くという、理論的余剰を突出させて、構造主義言語学を包摂し、かつ越える、言語学のニュー・パラダイムである」(p.8.) と規定する。

「言語学における意味論・語彙論の不振は根拠のないことではない」と考える著者はその不振の原因を「体系そのものの複雑さや、たんなる方法の未熟さというよりは、むしろ、分析者による“認識(意味の生産)”系解明の、事実上の棚上げに見る。意識、または無意識のかたちでの、その棚上げを避けたいものにしてているのが、分析者の側の“伝達(意味の交換)”系実用の論理への、例外なき埋没と指摘してみるのである」(p.6.) として「認識言語」の解明に取り組む。

本書の特徴の一つは、このように、意味論の対象に我々が日常使用する言語の体系だけを考えるのではなく、「認識言語」をも含めて考えるべきだとする点にある。したがって、本書は、単に「言語の意味」とか「語の意味の構造」とかを対象にするばかりでなく、その背後にある「認識のしくみ」をも考えようとする野心的な著作であると言える。

本書の主な論点は次のようにまとめられる。

- ①言語の意味を考えると、人間の認識の問題を棚上げにしては充分な議論ができない。
- ②人が日常生活で表現し理解するのに使用する言語(「伝達言語」)の他に、事物を認識するのに使用する別の「言語」(「認識言語」)がある。
- ③伝達言語において、「語」はそれが表わすものと、それ以外のものとの2つに切り分ける「二分法」の原理に従うが、認識言語においては、2語ごとの組み合わせからなる4組のペアによる「四分法」の原理に従う。
- ④「xとも呼ぶしyとも呼ぶ」ような、2つの語形がともに適用できる事物(「中間種」)が認識においてもっとも重要な役割を持つ。
- ⑤認識言語の形式的な枠組みは言語普遍的である。
- ⑥意味分析の不毛は「中間種」の無視に由来する。
- ⑦語の意味を分析するときに「二分法」的な考え方をとると、用法の事実と反した結果を

得ることになりやすい。

- ⑧二分法による語の意味の分析には、「客観的」な意味特徴発見の手だてがなく、内省に頼る偶然の発見しかない。
- ⑨四分法にもとづいた語の意味の分析には客観的な「弁別特徴発見の公準」があり、内省に頼らず容易に分析ができる。

①～⑤は本書の思想の根幹をなすもので、特に④が重要な役割をもつ。⑥～⑨はいわば応用編で、意味特徴の「発見の手順」を示そうとするものである。

①について評者は著者の考えに同感である。認識を正面から取り上げて議論する言語研究者は、著者のいうように多くはない。例えば、語の意味記述に使われる「意味特徴」の認識とのかかわり、すなわちその実体について明示的に述べる分析者は少ないといえる。ここでは、言語(の意味)について十分に納得のいく議論は期待できないと評者も思う。その意味で本書の姿勢は高く評価できる。

認識活動に深くかかわるものとして、古くから考えられてきたものに「概念」がある。著者は概念を「事物の意味」であるととらえ、それを体系的に表わすしくみを「認識言語」と呼ぶ。それに対して、「ことばの意味」は、日常使用する言語(これは「伝達言語」と呼ばれる)で表わされる、というのが論点の②である。「事物の意味」という表現の言わんとするところが具体的にどのようなことを表わそうとしているのかが評者には十分に理解できないが、認識のレベルと言語表現のレベルとが同一ではないという主張には同感できる(「概念と意味」については後述)。

論点③、④は本書の主張の中核をなすものである。これらの考えについて著者の言うところをもうすこし詳しく見てみよう。

本書の大部分を通じて説明の引合いに出されるのは「エプロン/マエカケ」の2語を含む「汚れ除けの衣類」を示す語である。著者はこの2語を用いて「東京山の手に住むはえぬきの若い女性」が「家事や店仕事用の汚れ除けをどんなふう呼び分けているかをくわしく調べ」た結果、これらの語の「用法」には「ほとんど個人差がない」にもかかわらず、「エプロン/マエカケ」の2語の意味の違いをたずねたときに得られる答えが「事実と合わない」ことに注目し、その原因が「二分法」にあるのだと考える(pp. 21-28)。x, yの2語について「xとはかくかくしかじかのものを言い、それ以外のものはyと言う」と説明するようなやり方が二分法である。つまり、「一語ないしは、一对の弁別的な意味特徴」で、対象(事物や他者)を二つ、二つと切り分ける」やり方であり、「たとえば、共通日本語をつかう人々は“腰下だけを蔽う〔汚れ除け〕”という意味特徴(意味成分)をもつ語、マエカケを用いて、マエカケであるものとそうでないものを二分して識別しているというふうと考えてきた。また、同様に、“洋式の〔汚れ除け〕”という意味特徴(意味成分)をもつ語、エプロンをさし向け、エプロンであるものとそうでないものを二分して認識している」と考えてきたのであるが、「人間の認識様式はこのような単純な“二分法”のくりかえしとはとても考えにくい」(p. 53.) のだという。

それに対して「四分法」は対象を「同時に、四つ、四つと切り分ける一方、一つにまと

(20) [書評]「意味をつむぐ人びと」

めあげてしまう」(p. 54.)ものである。このように対象を4つに分節し、かつ統合するに際して、人間は「通常の“言語”—伝達のために用いるタイプの—とは別系の言語を組織し」(p. 3.)ているのであり。この別系の言語は「“認識言語(思考の言語、内言)”」と呼ばれる。

認識言語の最小単位は、「二語ごとの用法のペア」である。語 x、y についてペアが4組できる。次のA~Dからなる1組みである。(pp. 3-4.)

A: x とは呼ぶが y とは呼ばない。

C: x とも y とも呼ぶ。

B: y とは呼ぶが x とは呼ばない。

D: x とも y とも呼ばない。

A~Dは、それぞれ「+x-」y」「+x-」+y」「+y-」x」「-x-」y」と表記される(それぞれのペアは「スキーマ」と呼ばれ、4つのペアの組合せは「スキーム」と呼ばれる)。

これをマエカケとエプロンに適用すると(pp. 54-55.A~Dの順序に注意)、

A. マエカケではあるが、エプロンではないもの。→腰下を蔽う和風の汚れ除け

B. エプロンではあるが、マエカケではないもの。→胸あてのついた洋式の汚れ除け

C. マエカケでもあれば、エプロンでもあるもの。→腰下を蔽う洋式の汚れ除け

D. マエカケでもなければ、エプロンでもないもの。→胸まで蔽う和風の汚れ除け

さて、目の前にエプロンがあったとすると、人間はそれを上記のA, B, C, Dの認識言語を用いて認識するというのである。問題のエプロンが例えばC類の「マエカケでもあれば、エプロンでもあるもの」だとすると、それはマエカケとエプロンの2語のペアからなる認識言語「+マエカケ+エプロン」によってとらえられるが、これはこのままの形では「伝達できない」ので、伝達言語の「マエカケ」ないし「エプロン」を用いるのだという。

認識言語と伝達言語の関係は、「伝達言語を組み合わせてスキーム化すれば認識言語が得られ、認識言語のスキームを解体すれば伝達言語が得られるようになっていく」(pp. 98-99.)関係にある。例えば、

こうして、中間種Cを吸収したA(実は疑似固有種A・C)を、あたかも固有種でもあるかのように表現することになった語形のマエカケは、その意味成分(語義成分)に“+[装着部位・腰下のみ]”を固着させて自立し、伝達系へ射出される。

一方、中間種Cを吸収したB(実は疑似固有種B・C)を、あたかも固有種でもあるかのように表現することになった語形エプロンは、その意味成分に“+[仕立て・洋式]”を吸着させて自立し、伝達系へ飛び立っていく。

伝達言語としての“語”の誕生である! (p. 108.)

ここで著者の言わんとするところを評者の理解し得た限りで言い換えるならば次のようになろう。

マエカケという語形で表わし得る事物を認識するときに、我々は伝達に使用する「マエカケ」「エプロン」などの形とそれに対応づけられる内容を持つ言語記号を使用するのではなく、目に見えず、伝えることも不可能な「+マエカケ-エプロン」「+マエカケ+エプロン」などの「形」とそれに結び付けられる「+[装着部位・腰下のみ]」、「+[仕立て・洋式]」

などと言った「意味」を持った「認識言語」を使用する。そして、当該の事物が「+マエカケーエプロン」ないし「+マエカケ+エプロン」と認識された場合、それを伝達するに際しては、「+[装着部位・腰下のみ]」という特徴だけを付与された語形「マエカケ」を使用するのであると。

著者のこの主張について評者はあれこれと考えてみたが、次にそのいくつかを示す。

A.本書に述べられる「認識言語の形式」はすべて「伝達言語の形式」の組合せから構成されている。すると、伝達言語がなければ認識言語が構成できない、あるいは認識言語の使用に先だって伝達言語が使用できなければならない、ということにならないのか。

B.本書では「xともyとも言える」事物を認識する場合と、「xともyとも言えない」事物を認識する場合(例えば、「-エプロン-マエカケ」でとらえられるものは「カッポーギ」とされる)とは峻別されている。ところが、事物の中には「xともyとも言える」と同時に「xともyとも言えない」とも言えそうなものが存在する。すなわち、「xともつかず、yともつかないが、xないしyと絶対に言えないわけでもない。といて、無条件にxないしyと言うこともためらわれる」事物である。こうしたものはときに「xy」という語形で表わされることがあるが(例えば、「アマカライ」「人魚」「ウナギイヌ(赤塚不二夫の漫画に登場する、頭と尾がウナギの姿をした犬)」、これは著者の言う「+x+ y」とは別のものである。すなわち、甘辛いものを単に「甘い」ないし「辛い」といったのでは不十分であるのに対し、エプロンともマエカケとも言える対象をエプロンないしマエカケと呼んでも不都合ではないからである。また、例えば、ここに「服装・体型は明らかに男であるが、言動はどう見ても女としか思えないような人間」や「髪が長く、胸もふくらんでいて女のように見えるが実は男であるような人間」がいたとする。これらの対象は一方で「男とも言えるし女とも言える」ものだが、また一方で「男とも女とも言いにくい」ものでもある。これもまた著者の「中間種」とは異なる。このような対象は「変な男」と呼ぶのが適当なものだからである(エプロン、マエカケの場合は、中間種をエプロンと呼んでも、それが「変なエプロン」ということにはならない)。著者はある語形で表わし得る対象を固有種と中間種に「二分している」のだが、二分法がうまく働かない対象も存在するのではないか。ちなみに、こうした「自然に属する事物」の概念ないしそれを表わす言語記号の意味は、近年「典型」の概念に基づくいわゆる「プロトタイプ論」で論じられるようになってきているが、本書にその方面への言及はない。いずれにせよ、こうした事物の処理に著者の認識言語がどのようにかわるのかが本書には述べられていない。

C.認識言語の「語」については詳述されているが、「文」についての言及はほとんどない。意味の理論という以上、例えば、句のレベルの言語表現の意味と語の意味とがどのように関係づけられるのかを述べるべきではないのか。

さて、著者の言う「スキーム」は、評者には「伝達言語の語の用法を体系的に述べるしくみ」ととらえることが可能だと思われる。著者が言うように「二分法」の論理で記述すべき対象を眺めると、「中間種」の存在を見落とす可能性がなくもない(上述の論点⑦)。そ

(22) 〔書評〕「意味をつむぐ人びと」

の点で、スキームは語の用法を整理するのに実用的な価値を持つと言える。本書第VI・VII章ではスキームを用いて、日本語諸方言の話者の「認識の構造」が比較対照されていて、各方言の用法の異同が分かりやすい形で呈示されている。それが認識構造を表わすかどうかはさておいても、語と語のつながりをこのような形式で示すことは、1語ごとの用法を羅列するのに比べ、比較の資料として大きな力を持つものであり、また対照研究の言語資料を集めるのに利用価値が高いと言える。

評者が大いに興味を引かれたのは、論点の⑧、⑨である。著者の言うように、「四分法」にもとづいた「弁別特徴発見の公準」が「語の意味成分の決定能力をもつような装置」(p. 67.)であり、「脳を切り裂くような意味説明の苦しみを味わうことなく、二語の意味の種差のポイントを指摘できる」(p. 160.)のものだとすれば、語の意味の説明に四苦八苦している評者のような人間には実にありがたいことである。弁別特徴発見の公準はスキームに適用されて、意味特徴を得る公式であり、以下の(1)、(2)を含む(p. 76.)。なお、公式(3)は「 $D \cdot A/B$ 」、(4)は「 $D \cdot B/A$ 」という組合せであり、「最終的には、公式(1)～(4)を集めて、(I) $C \cdot A/D \cdot B$ 、(II) $C \cdot B/D \cdot A$ とすることができる」(p. 81.)とされる。

$$\begin{aligned} \text{公式(1)} \quad C \cdot A/B \rightarrow \text{解} & \begin{cases} \text{i) Aのポジティブなタイプの, 固有の} \\ \text{意味特徴: } +[S] \\ \text{ii) Bのネガティブなタイプの, 固有の} \\ \text{意味特徴: } -[S] \end{cases} \\ \text{公式(2)} \quad C \cdot B/A \rightarrow \text{解} & \begin{cases} \text{i) Bのポジティブなタイプの, 固有の} \\ \text{構造特徴: } +[M] \\ \text{ii) Aのネガティブなタイプの, 固有の} \\ \text{意味特徴: } -[M] \end{cases} \end{aligned}$$

*公式(1)は“ $C \cdot A$ にだけ共通に見られ、 B にはけっして見られない特徴こそは”と読んで解へつなげばよい。公式(2)も同様。

* S : Significance, M : Meaning の頭文字から、たまたまとつたものにすぎない。

これらの公式をマエカケ、エプロンに適用すると、(1)から“+/-[装着部位・腰下のみ]”、(2)から“+/-[仕立て・洋式]”が得られるのだという。そして、“+[装着部位・腰下のみ]”が積極的な固有の性質として A に与えられ、“-[装着部位・腰下のみ]”はそれがないという消極的な固有の性質として B に与えられる。“+[仕立て・洋式]”は積極的な固有の性質として B に与えられ、“-[仕立て・洋式]”はそれがないという消極的な固有の性質として A に与えられる。また、 C は A の積極的な固有の性質“+[装着部位・腰下のみ]”と、 B の積極的な固有の性質“+[仕立て・洋式]”とをあわせもつことになる、のだとされる。(pp. 76-77.)

さて、二分法においても、その切り分けの背後に意味特徴が関与することになるはずだが、そうした意味特徴を得る「客観的な手続きを何ももっていないのである。たとえ、なにがしかの語の用法にあたったにせよ、その観察から、マエカケという語の意味成分が“+”

「装着部位・腰下のみ」で、エプロンという語のそれは“+「仕立て・洋式」”だということの内省によってしか帰納できない」(p. 67.)と主張される。

この公準の力を示すものとして、一般には説明がむずかしいとされている語の例として著者があげているのは「ウツクシー／キレー」の2語の区別である。これを考えるにはまず、「キレーとはいうがウツクシーとはいわない対象」には「①掃除した便所、②洗った雑巾」があり、「ウツクシーとはいうがキレーとはいわない対象」には「⑥親子の情愛、⑦席をゆずった少年の行ない」があり、「キレーともウツクシーともいう対象」には「③桜の花、④景色、⑤青空」がある、ということに注目する。そして、①②③④⑤にだけ見られ、⑥⑦にはけっして見られない特徴と、③④⑤⑥⑦にだけ見られ、①②にはけっして見られない特徴を求めればよいのだとされる。すなわち、「キレーという語の意味成分は、その評価を“物質的な対象”にかぎり、ウツクシーという語のそれは、その評価を“鑑賞的な対象”にかぎっているといえよ」(p. 160.)のだと言うのだが、評者には、この結論が「苦勞せずに」得られるとはとても思えないのである。

評者がこの2語を分析するとしたら、「ウツクシーの用法のすべてに共通して見られる特徴」と「キレーの用法のすべてに共通して見られる特徴」とを求める。また、それと平行して、この二語が対立する用法を調べ、両語の区別に関与する特徴を求めることになる(このやりかたで得られる意味要素には、著者の方法で得られる意味特徴が含まれることになる)。このようなやり方において「頭を働かせる」度合は著者の提唱する方法を用いた場合と大差ないように思える。

さて、キレーとウツクシーがどういう対象について使われるかをこのような方法で明らかにできたとしても、この2語の意味がすべて分析されたわけではない。これを他のウルワシイとかミゴトとかセーケツとかとのペアを作って調べてみても、事情は同じである。いったい、これらの語は「評価」を表わすと言うのだが、その内容こそが知りたいのである。2語を、あるいは2つの対象を弁別する特徴を求め続けてみても、弁別には関与しないがそれらに共通の「本来的な」特徴は得ることができない。マエカケやエプロンが「汚れ除け」であることは、2語ごとの用法の組合せだけから「客観的にかつ内省に頼らないで」導くことは不可能だと思われる。

用法と言え、キレーニ／ウツクシクの用法は、キレーナ／ウツクシーの用法とはだいぶ様子が異なる。キレーニとは言えるが、ウツクシクとは言にくい例としては「部屋をキレーニかたづける」「出されたものをキレーニたいらげる」、ウツクシクとも、キレーニとも言える例としては「部屋をキレーニ／ウツクシク見せる」「キレーニ／ウツクシク着飾る」があるが、ウツクシクとは言えるが、キレーニとは言にくい例はないと思われる。こうした用法を眺めると、キレーには必ずしもウツクシーに見られたのと同じような「評価」がないのではないかという気がしてくる。

著者に言わせると、「気がする」などという「内省」に頼るのはいけないうことになるとのところが、評者は「内省」は意味分析の重要な手がかりであると考えたものである(同時に、その内省を裏付ける形式上の証拠を求めることは言うまでもない)。いずれにせよ、キレー

(24) 〔書評〕「意味をつむぐ人びと」

とウツクシーの2語には、著者があげているような「二語ごとの用法」以外にもいろいろな用法があるのであって、この2語の意味を分析するというのは、そうした用法のすべてにわたって分析の手を加えることではないかと考えるのである(キレー/キレーニ、ウツクシー/ウツクシクがそれぞれ「別語」であるとして両者の関係を棚上げにすることも可能だが、賛成できない)。

著者は「xともyとも呼ぶような対象」(+x-y)である中間種を極めて重視する。そして、中間種が固有種「+x-y」と固有種「+y-x」とを従えた「スキーム」を「ブリッジ型」と呼ぶ(ここまでに引用した例はすべてこの型である)。スキームにはこの他に、中間種「+x-y」と一方の固有種「+x-y」だけをもち他方の固有種「+y-x」を欠く型がある。たとえば、マエカケとサロンエプロンについては「サロンエプロンと呼ぶがマエカケと呼ばないような対象」が実在しない。このような型は「抱合型」と呼ばれる(これは、いわゆる「上下関係(hyponymy)」にあるもので、マエカケが上位語、サロンエプロンが下位語である)。さらに、「+x-y」「+y-x」の2つの固有種はあるが、「+x-y」という中間種を欠く型がある。例えば、エプロンとカップオーギである。両語がともに使える対象が存在しないのである。これは「分離型」と呼ばれる。これら3つの型について著者は次のように言う。

“ブリッジ型”は基本構造の典型であり、“抱合型”や“分離型”のそれは、その変種をなすものにすぎない。“抱合型”や“分離型”の基本構造を“ブリッジ型”に還元できても、その逆は不可能である。中間種の存在は、言語中で、いよいよありふれたものとなってくる。(p.125.)

この3種の型のスキームを用いた、日本語諸方言の話者の「認識の構造」の比較対照事例のうち、西宮では7つの語形を組み合わせ、合計21組の認識言語のスキームを構成しているが、その21通りの基本構造の型の内訳は、ブリッジ型2、抱合型8、分離型11である。また、高崎では、15のうち、この順で、2-7-6、明石では10のうち、3-4-3、神石(じんせき)では28のうち、2-14-12となる。なお、「共通日本語(東京山の手)」では、10のうち1-3-6となっている。これらのデータは、具体的に生じるスキームは、抱合型か分離型が大多数で、ブリッジ型は少数派であることを告げている。ブリッジ型が「典型」であるのなら、どうしてこのような分布になるのだろうか。

実は、認識のスキームの型にはこの3種の他にもう1つある。それは、固有種を欠いて、「+x-y」しか持たないものである。この種のスキームは「孤立型」と呼ばれる。例えば、「サロンエプロンともサロンマエカケとも呼ぶ」汚れ除けは存在するが、「サロンマエカケとは呼ぶが、サロンエプロンとは呼ばない」固有種や「サロンエプロンとは呼ぶが、マエカケとは呼ばない」固有種は存在しない。孤立型に属するこの2つの語について「したがって、サロンマエカケとサロンエプロンは完全に同概念・同義語とっていい」(p.129.)と述べられている。著者がこの2語に限らず、「孤立型」に属する任意の2語を「完全に同概念・同義語」と考えていることは、前後の文脈から明らかである。さて、孤立型に属する語としては、他に例えば「売る/買う」がある。「一太郎が花子に松を売った」をx、「花子が一太郎から松を買った」をyとすれば、「+x-y」は存在するが、「+x-y」「+y-x

x)は存在しないから、この2語の組み合わせからなるスキームはたしかに孤立型である。それでは「一太郎が花子に松を売った」と「花子が一太郎から松を買った」という「事態」とそれを表わす「伝達言語」はそれぞれ「完全に同概念・同義」と言えるだろうか。もし、言えると主張すると、「AはBより大きい／BはAより小さい」「注意書きを読んでから記入すること／記入する前に注意書きを読むこと」「まだ半分ある／もう半分しかない」なども「同義表現」だと主張することになりはしないだろうか。

評者は孤立型の2つの対象について、それらの「概念」が同一であるという主張には(著者とは異なる「概念」の概念規定をした上で)同意できる。ただし、同一の概念を表わす表現が、「意味」も同一であるとする考えには同意しかねる。評者は、概念と意味との関係について、概略「ことばの意味は、そのことばの形によって表現される概念を一定の観点からとらえる様式である」との考えを持っている。同じ概念をいろいろに異なった観点から眺められるから、それを表わす表現は1つとは限らず、したがって意味もその数だけあることになる。例えば、「四角形」と「四辺形」は、任意の表現において、「真値値を変えることなく」一方を他方で置き換えられるから、同一の概念に対する表現であるが、一方は、「角」に、他方は「辺」に注目しているから、意味は異なる、というように考える(この考えは、石黒ひで著『ライブニッツの哲学』岩波書店、1984にもとづく)。

本書は評者には決して読みやすいものではなかった。それは、言語の認識と伝達を論じる際に「疎外・交換価値・使用価値・物象」など唯物論の概念を用いた説明が多くみられたこと(評者はこうしたことがらについてよく理解できないゆえ、これらの点に関しては評言の資格がない)、一部言語学者に対する必要以上と思われるような攻撃的口調にとまどいを感じたことなどによるが、著者の比喩的な言い回しを多用する「文体」にもその原因があるように思われた。例えば「人々は〈二分法〉の木樁で中間種の頭を叩き、“伝達”可能な単語ないしは、その単状配例から成る、通常タイプの言語を“認識言語”から叩き出すことになるのである。“認識”系ではカナメの位置に踊り出る中間種も、“伝達”系では人柱の位置に埋もれるという、これは、いかにもダイナミックなしくみである」(p.5)。こうした表現が「普通の」表現であれば、評者にはもう少し読みやすかったのだろうと思う。

構成意味論は「〈記号〉を、〈観念(意味連関)〉の世界にも見いだしつつ、〈事物・他者(実在)〉〈意味連関〉〈言語構造〉〈言語作品〉を円環でつなぐ、新しい時代の四項図式のパラダイムである」(p.253.)との主張で本書の本論は締めくくられている。本書の思想が、そのカバーに刷りこまれているように「言語学史上の画期的な発見!」であるのかどうかは、「パラダイムの変換」を待って初めて定まるのかも知れない。

(1986年7月7日発行 海鳴社刊 46判 358頁 2500円)

— 聖心女子大学助教授 —

(昭和63年9月29日 受理)